
幻獣観察物語～吸血鬼～

Douke

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻獣観察物語〜吸血鬼〜

【Nコード】

N8952Y

【作者名】

Douke

【あらすじ】

一人、森の中を歩く青年がいた。森の中には湖があり、小さな少女の姿があった……。

この作品は、『吸血鬼の噂話』を長編にリメイクした作品です。

パート1

一人、森の中を歩く青年がいた。

年齢は若く、おおよそ二十代前半であろう。けれどその類には、青年には似合わない傷跡が深く刻まれていた。

格好はこれまた似合わないコートを着ており、頭にはベレー帽を被っていた。

そしてその手には、旅行用のトランクがあった。

青年の歩調はどこか焦っているかのように早足だった。

まだ日は高く、近くに獣のうなり声は聞こえないので、追われているというわけではない。

ただただ、森の中を早足で歩いていた。

その顔には、期待と興奮。

しばらく歩いていると、綺麗な湖があり、その近くに一人の少女が湖の水を手ですくって飲んでいた。

しかしその格好は少しおかしく、ネグリジエを着ていて、その上に黒いマントらしきものを身にまとわせていた。

「見つけた……！」

青年は少女の姿を見た途端、少女に向かって走り出した。

足音に気付いて、少女は視線を湖から青年へとゆっくり移した。

静かに立ち上がると、警戒しながら青年に尋ねる。

「……お主、何者じゃ？」

その少女に似合わない口調や雰囲気は、まるでどこか高貴の貴族のようだった。

少女の問いに答えず、青年は少女の元まで走ると、その場で荒れた息を整える。

ゆっくりと深呼吸をし、少女に向き合った。

「僕はマルク・ヴァンプール。ただの旅人さ」

「……なるほど。旅人であったか。しかしこの先にはただ森が広が

っており、森を抜ければただ山があるのみじゃ。戻って別の所を旅するがよいぞ」

「いや、僕の旅にはきちんとした目的があつてね。今ここに居る君に聞きたい事があるんだ」

「愚かな人間に答える口は持たぬが、特別に答えてやろう」

愚かな人間と聞いた瞬間、青年は確信した。

けれどそれを確認するかのうちに、青年は少女に尋ねた。

「君は……魔女かい？」

パート2

この世の中、人にあらずものは忌み嫌われていた。それらは全て『化け物』などの一言にまとめられ、住処を奪い、殺していた。

たとえそれが、人間にとって友好的なものであっても——だ。しかし、今でも人間に見つからないようにひっそりと生き続けている。

そして化け物の基準も大きく変わっていた。

人にあらずものだけではなく、人間という道から外れた人間も忌み嫌われるようになってしまった。

例えば魔女。

人に害するものを作り、時に妖しげな言葉を使う。

そう思われるだけで、処刑された人は数多くいる。

マルクはそういう『化け物』といったものを探し、旅をしている。そして先日泊まった村にて、近くの森に魔女が住んでいるという噂を聞き、その噂が事実かどうかを確かめるため、向かったのだが――。

「お主は馬鹿か？」

マルクの期待は、少女のその一言であっさりと打ち砕かれた。

「今どき魔女なぞ馬鹿馬鹿しい。お主は子供か？」

「へ……？ つ、つまり君は魔女じゃないの！？」

「そう言っておるじゃろうが」

そんな……、と言いながら手に持っていた旅行用のトランクを地面に落とした。

けれどすぐにマルクは立ち直った。

「……まあ、噂ってのは大体がデマだしね。こういう事もあるよな。ちなみにこの辺りに君の他に人はいる？」

「この辺りは我を恐れてか、人どころか獣もうつつかんぞ」

「だよな……」

ふと、そこで少女の言っている事が少しおかしい事に気付く。

「……君を恐れて？ 魔女じゃないんだから、どこからどう見てもただの少女にしか見えないけど……」

すると少女は無い胸を張り、急に威張りだした。

「ふふん。我が誰だか知りたいか？」

「そりゃ、こんな所に君みたいな少女が、そんな変な格好をしているってのは疑問に思うけど」

「へ、変じゃと！？ お主の方がよっぽど変な格好じゃ！ 特にそのベレー帽！」

「なっ！？ 確かに格好が変なのは自覚してるけど、ベレー帽を悪く言うな！ それを言うなら君のそのマントだって似合っていないよ！」

「き、貴様……！」

すると、肩を震わせながら少女の体が宙に浮き始めた。

「へ……？」

「ふ、ふふ……。我を怒らせたな？ この我を怒らせたら、どうなるかその身に刻ませてやる！」

そして爪を立て、その小さな体をマルクに向かって飛翔した！

「我が名はミネル・スカーレット！ そして——吸血鬼じゃ！」

あと数センチで、マルクにその爪が届くところで……。

「ぎゃっ！」

丁度、木々の隙間から差し込む日差しが少女の顔に当たり、爪ではなくそのままマルクに体当たりするような形になってしまった。

それをマルクはもろに喰らい、二人で抱き合うような感じに巨樹に当たるまで転がった。

「ふ、ふにゅ……」

「魔女じゃなくて、吸血鬼だったのか……」

止まるさいに、思いつき頭をぶつけたマルクだったが、そんな

事を気にも留めなくて気絶しているミネルを見ていた。

このままじつくりと観察したい。だけどそれだとただの観察だ。僕がしなくちゃいけないのは、生態観察なんだから。

そう思いながら、マルクはミネルをおぶりトランクを左手に持って、森の奥に進んだ。

マルク・ヴァンプールの第十三回目のレポート

今回も、なんとか幻獣の一種である存在に出会える事が出来た。出会った幻獣は、なんとあの人間の血を吸うことで有名な吸血鬼だ。

出会いがしらに空を飛んで襲われるという、とても不思議かつ貴重な体験をしたが、はたして本当に吸血鬼は人間の血を吸うのか？そしてどれほどの脅威があるのか？

前回同様に、その事について調べていきたいと思う。

さて、初めての方もいると思うので、まず幻獣というのがなんなのか。まずはそこから説明していこう。

幻獣とは文字通り、幻とされる獣。

そのまま読めばそうなるが、この本の中では少し意味が異なっている事に気をつけて欲しい。

僕の中の幻獣とは、人間から嫌われ、恐怖を与えさせ、それにより人間の手によって住処を奪われ殺されてしまった存在の事を指す。なるほど。こう書いてしまうと、ただただ幻獣というのは『いてはいけない存在』と思ってしまっただろう。

だがそれは違々と、僕は考える。

確かに中には凶暴で、恐ろしい存在もいるだろう。だけれど中には人間と友好的な存在もいるだろう。

もちろんこれは僕の勝手な思考だ。ほとんどの人がそうは思えないだろう。

しかし、僕はこれまでそういった存在と関わってきた。もし凶暴な存在がいなければ、いままで僕は本を出す事が出来なかったであらう。

信じるか信じないかは、もちろん自由だ。でもこれだけは分かって欲しい。

たとえ忌み嫌われる存在だとしても、きちんと手を取り合えば共に歩む事が出来るのだと。

それでは、今回出会った吸血鬼の特徴について説明しておこう。ちなみに今その吸血鬼は、日ざしに当たってしまったからか気絶してしまい、偶然見つけた小屋のベットのの上に寝かせている。

外見は八〜十歳くらいの少女。ロングヘアーの金髪でとても可愛らしいブローチを着けている。中身を見てみたいところだが、勝手に見てしまうのは人としていけない行為なので、我慢する事になっている。格好は白いネグリジェの上に何故か黒いマントを羽織っていた。

襲い掛かってきた時はどうしようかと思ったが、こうして見ると、ただの幼い少女が眠っているだけだ。

だが話し方がかなり少女にしては独特で、まるで貴族の令嬢みたいな話し方だった。もしかすると、この吸血鬼は前は人間で、他の吸血鬼に噛まれて自身も吸血鬼になったかもしれない。

ともあれこれは仮定なので、真実は分からないがこれからこの吸血鬼について調べていきたいと思う。

パート3

目を覚ましたミネルは、いまいる場所がどこだか咄嗟には分からなかった。

「こ、ここは……」

次第にここが自分の暮らしている小屋だと分かった。

けれど、いつの間に戻ってきたのだろうか？ 確か湖の水を飲んでいたら、変な人間がやってきて……。

そこまでは覚えているが、どうしてもその先が思い出せない。

頭だけを動かすと、そこにはテーブルでうたた寝しているマルクの姿があった。

自分がベッドにいて人間がここにいるという事は、また日光に当たって気絶してしまったのだろうか。だとしたら、記憶が無いのも納得できる。

体を起こしてマルクの方に近づくと、どうやらマルクは、何かを紙に書いている最中に寝てしまったようだった。

ミネルが何を書いていたか見るために、紙を取ろうとすると……。

「……ん、あれ、起きたんだ」

ミネルが近づいてきた気配に気付いたのか、いきなりマルクが目を覚ました。

「お、お主……何故ここにおる！？」

驚いたミネルは、どうしてマルクが小屋にいるのかを、少し戸惑いながら尋ねた。

「ふわ……ああいや、ごめん。いきなり君が気絶したから、とりあえず横になりそうなところを探していたら、この小屋を運よく見つけてさ。近くの村に戻ろうかと思ったんだけど、吸血鬼の君を連れて行けないだろ」

「ここは我の家じゃ！ お主はさっさと出て行け！」

「君の？ ああ、だからこんなに整ってるのか」

マルクはミネルの言葉を無視して、小屋の中を見渡した。

小屋の中には本棚や暖炉、他にも服をしまうタンスなどといった、人間の生活に最低限必要な家具があった。本が散らかっているなどという事は無く、埃はひとつも落ちていない。

ただ、ひとつ。マルクは気になることがあった。

「……でもなんで、こんなところに木こりの斧が？」

これだけ整った環境に、なぜか入り口の横に斧がぽつんと置かれていた。

ミネルはマルクの質問に答える。

「ふん。ここは元々木こりの家みたいなの。長らく誰も使用しておらんかったから、我が有効活用させてもらっておるだけじゃ」

「なるほど。だから吸血鬼だけじゃなく、普通の人でも暮らしている環境なんだな」

「……お主、いったいどういふつもりなのじゃ」

マルクは質問の意味が分からず、問い返した。

「どういふつもりって？」

「私の正体を知ったにも関わらず、何故逃げぬ？ 何故怯えぬ？

何故殺そうとしない？」

「おいおい殺すだなんて。吸血鬼なんて貴重な存在、殺すなんてもつたいないだろ」

マルクとしては真面目に答えたつもりだが、ミネルにとっては逆に不審感が強まるだけだった。

そしてさらに、マルクは言った。

「そんなことより、僕もしばらくここに住み着いていいかな？」

「はあ……？ お主、なにを訳の分からんことを言っておる？」

「だって、すでに全滅したはずの吸血鬼が目の前にいるんだ。こんな貴重な存在を観察しないわけにはいかないだろ！」

「観察……？ お主はただの旅人であろう？ 何故我を殺さずに観察するのだ？」

「本にして売り出す！」

パート4

マルクの目はまるで子供のように輝いていて、どこか固い決意が秘められていた。

今の世の中、本を書くという職業は稀であつた。

そもそも本を読むこと自体が少ないのだ。それゆえに本を出したとしても、売れず、すぐに別の職業をする事が目に見えている。

だが、やはり売れる人はいる。当たれば一躍有名になり、大金を手に入れる事が出来る、まさに賭博のようなものだ。

「そしていつかは、全世界に僕の本を広めて——」

「なるほど。つまりお主はこう言いたいのだな？」

マルクの話を通り、冷たい口調でミネルは言った。

「自分の利益の為に、我という存在を観察すると」

「それはちよつと違うかな。確かに僕は旅をする為に利益は欲しいさ。でも僕の場合は……」

「たとえ違つたとしても、我にとっては自分という存在を勝手に売られる事実は変わらぬ！」

ミネルは、自分でも知らない内に怒鳴つていた。そしてそれは、止まらずにどんどんあふれ出していく。

「分かるか人間、自分の存在が他人に売られるのを！ 勝手に買われていくのを！ 分からぬだろうな。何故ならお主は人間、我は吸血鬼だからじゃ！ 存在自体が違う！ なにもかも！ だから我は人間と関わるのをやめたのじゃ！ それなのに、そんな我をお主が観察するじゃと？ ふざけるのも大概にしろ！ 我の……我の気持ちも知らずに！」

そして小屋の出口である扉を指差し、

「ここから出て行け！ さもなければ……殺すぞ！」

あまりにもミネルの剣幕に押され、マルクは大人しく従つた。

「わ、分かつた。この小屋からは出て行くよ」

急いでテーブルの上に広げていた紙やペンをトランクにしまい込み、逃げるかのようにマルクは小屋を出て行った。

出て行ったのを確認したミネルは、ふらふらとベットに倒れこんだ。

言ってしまった。

決して口にはしないと、決めていたのに。

あんな簡単に『殺す』なんて、言ってしまった。

「……母上、父上」

今は亡き存在を、ミネルは泣きながら呟いた。

「……しくったな。こうなるとは思わなかった」

小屋を出て行ったマルクは、その近くにある樹木を背もたれにして、座り込んでいた。

「でも、諦めるつもりは無いからな」

まるで自分に言いつけるように。あるいは怒らせてしまった吸血鬼に向けて。

「これは僕じゃなくて、君みたいな存在を救うために、やっていることなんだから。それが達成されるまで、僕は諦めないし、絶対にくじけたりしない。だってこれは……」

僕の罪の償いでもあるんだから。

最後の一言を、マルクは口にはせず心の中で呟く。

その後マルクは野宿をするために、道具を広げ小枝を集め始めた。

パート5

その夜。

マルクは焚き火のわずかな明かりで、本を読んでいる時だった。少し離れたところから、微かに音が聞こえた。

「……………」

まさか狼が？ そう思ったが、ミネルは自分の事を恐れて人どころか獣すら近づかないと言っていたのを思い出し、マルクはすぐに別の可能性を考えた。

とりあえず荷物をまとめ、焚き火を消さないまま隠れる事にした。樹木の陰に隠れていると、音は小さいが徐々に近づいてくるのがわかる。音とその間隔からして、どうやら人のようだ。しかも一人ではなく、複数。

森の中なので顔はよく見えないが、焚き火のおかげでシルエットだけは見ることが出来た。

数は三人。どちらも体は大きい巨体で、その手には農作業で使われる鍬や斧が。おそらく近くの村にいる男達だろう。

（やっぱり、目的はあの子か）

マルクの推測では、魔女と噂されているあの子を捕まえに来たと考えている。

ただでさえ忌み嫌われている存在だ。討伐、あるいは捕獲しようとするのは、もはや当たり前前の行動だ。

「……………」でも、そうされると困るんだよな」

マルクはトランクから果物ナイフを取り出した。

男達が小屋の中に入ると、ミネルはベットの上で寝ているところだった。それを確認すると、急いで手と足を縄で縛り、喋れないように口も縄で縛ろうとした。その時、ミネルが目を覚ました。

「な、なんじゃお主ら！？」

「おい、目を覚ましやがった！」

「急いで口を縛れ！」

必死に抵抗しようとしたが、さすがに男達の腕力には歯が立たず、すぐに拘束されてしまった。

「むー！ むー！」

「へ、へへ……。安心しな、魔女。俺たちはお前を殺しに来たんじやない」

「悪いが、俺たちの生活の為になつてもらおう」

それを聞いた瞬間、ミネルは全てを悟った。

自分はどこかの貴族が王に売られるのだと。

いままでは、誰かが小屋に入ろうとする前に気付き、木こりの斧を使って追い出してきた。が、疲れていたせいで反応が遅れてしまった。

このまま売られてしまつても、いずれ殺されてしまうだけ。

ミネルにとつて、それは一番いやな事だった。

「むー！」

「こいつ、おとなしくしやがれ！」

たとえ縛られたとしても、ミネルは体を無理矢理に動かして、なんとかして逃げようとした。

しかし、所詮は少女の体。あっさりと抱えあげられてしまう。

「よし、このまま……」

「村に戻つて売ろう、とか考えないでくれよ」

小屋から出ようとした男達の前に立ちふさがったのは、マルクだった。

男達は突然の乱入者に驚いたが、一番驚いたのはミネルだった。

「むー！？ （な、何故お主がここに！？）」

「ゴメン、約束を破つて。でもこの状況じゃ、そんな事言ってる暇じゃないだろ？」

「だ、誰だお前！ こいつは俺たちの獲物だ！」

「おいおい。僕は別に奪いに来たとか、そういうのじゃないさ。で

も、その子を攫うのは勘弁して欲しいんだ」

体つきからして、人数からして圧倒的に男達が勝っているのに対し、マルクは至って冷静だった。

「だってその子は、僕の大事な友人になる予定なんだから」

パート6

マルクはそう言った刹那、扉から小さな光が飛び込んできた。

光はマルクや男達を見るかのように動き回り、ミネルの顔の前で止まった。

突然現れたそれに、マルクと男達は驚き、その場に立ち尽くしていた。

すると光は再び動き出し、男達の頭上でキラキラと輝く粉を落とし始めた。

「な、なんだこれは……？」

「急に、眠気が……」

驚く事に、その粉を吸った男達は急にあくびをし、その場で眠り込んでしまった。

担がれていたミネルは落ちたが、その前にマルクがミネルの体を受け止めた。

マルクは持っていた果物ナイフで、ミネルの縄を解いていると、再び小さな光がミネルの元にやってきた。

「ふう……。助けてもらいすまん、リンよ」

「リン？ それはこの光の名前かい？」

「光じゃなくて、フェアリーです」

マルクの疑問に答えたのは、なんと小さな光——フェアリーだった。

『初めまして勇敢でお優しい紳士さん。私の名前はリン。以後よろしくお願いします』

「こ、これはご丁寧に。僕はマルク・ヴァンプール。旅人で物書きをしている者さ」

光に目が慣れてきたのか、マルクはリンの姿を捉える事が出来るようになった。

まるで小さな小人のようだった。背中には蝶のような小さくて薄

い羽が四枚ある。

「それより、何故お主がここにおる？ 出て行けといったはずであるろう？」

「確かにそうだけど……出て行けといったのはこの小屋で、森じゃないだろう？ 近くで野宿でもして、そこから観察しようかな、と思つて」

「お主は馬鹿か？ 今この場でおぬしの血を――」

『こらミネル』

「あたっ」

リンは、ミネルのおでこにその小さな手で叩いた。

『あなたはあたしとマルクさんに助けてもらった身でしょう。それなのにその態度はなんですか？』

「し、しかし、実際に助けてもらったのはお主じゃ。こやつからは……」

『マルクさんが助けにきていなければ、私の助けも間に合わなかったわ。それに、あなたの流儀を自分で破るつもりなのかしら？』

「むっ……」

ミネルはしばらく悩んでいたが、マルクに向き合い、頭を下げた。

「……助けてもらい、礼を言わせて貰う」

「い、いやそんな、僕はただ僕の為にさせてもらっただけさ」

「本来なら客として招きたいところだが……」

ミネルは急に頭を上げて、マルクの事を睨み始めた。

「我はまだお主のことを許しておらん。今すぐに出て行け」

『ミネル』

「う……」

再びリンに叩かれ、ミネルはしぶしぶ言った。

「……この小屋に入る事は認めん。が、この近くで野宿することぐらいは認めてやる」

「うん。僕はそれでもいいよ。野宿するのには慣れてるからね」

『私からも礼を言わせて貰います。ミネルを助けていただき、あり

がとうございました』

「いや、実質僕は何もしてないよ。それより、彼らはどうする?」

マルクが言っているのは、リンの粉で眠った男達のことだ。今もまだ深い眠りにについている。

「血を吸ってから、村の近くに捨てたいが……。こやつらの血はま
ずそうじゃ」

「それなら、僕が運んでおくよ。せめてそれぐらいはさせてくれ」

『では、私が村まで案内させてもらいますね』

「ありがとう、助かるよ」

この暗い中、マルク一人では森のなかで迷ってしまうため、リンの申し出はマルクにとってとても助かる事だ。

男達を縄で縛ると、マルクは小屋の近くにあった荷車に乗せて、リンの案内で村まで運び始めた。

リンの光はとても小さいが、月の光に負けなくらいに輝いているので、見失う事は無かった。

「そういえば、リンさんはフェアリーなんだよね?」

『リン、で結構です。そうですね、もしくは妖精と言ったほうが分かりやすいかもしれません』

妖精。マルクは本で読んだ知識を思い出していた。

パート7（前書き）

ここには妖精についての解釈が書かれていますが、これは作者自身の考えであるため、本来の妖精とは異なっています。その事をご了承ください。

パート7

——古くから森にいる幻獣で、人間との共存していた事もある。どこに獲物があるか、川があるか、この木は切り倒していいのか。それら全てを、彼らは知っていた。

彼らだけが持つ小さな羽からは、りんぷん 燐粉という粉を出す事ができ、いろんな生物を眠らせたり麻痺させたりする。そうやって、脅威を動けなくさせ、安全を確保する習性がある。

ただ、彼らは非常に気まぐれであり、親しくなつたからといって油断してはいけない。

協力して手に入れた食料を、急に横取りしてきたりなど、ただの気まぐれで起こしてしまう。また逆に、我ら人間を助けるのも気まぐれでしかないのだ——。

そう、マルクが読んだ本には書いてあった。

だがしかし、リンを見ているととてもそうは思えなかった。

「妖精って、よく気まぐれで人間を助けたりするって聞くけど……。実際はどうなんだ？」

「気まぐれ、ですか。確かにあなたを私の燐粉で眠らせなかったのは、私の気まぐれです」

前を飛んでいたリンは、マルクと並びそう答えた。

『ミネルは私の大切な友人。今日もただの気まぐれで遊びに行ったら、襲われていたので驚きました』

「気まぐれって……。むしろ悪い予感がしたから、の方が正しいような気がするよ。そこまでいくと」

『ふふ……。そうかもしれませんね』

マルクが少し苦笑しながらいうと、リンは微笑んだ。

『では、あなたを巻き込まなかったのは、あなた方でいういわゆる私の勘、ですね』

その微笑みは小さかったが、とても温かい笑みだった。

「それにしても、君はミネルとずいぶん親しいんだね。彼女とはいっ
つから？」

『そうですね……。今から大体百二十年くらい前からですね』

「百二十年！？ あ、いや、そう、か。吸血鬼だもんな。そのぐら
い普通か」

一瞬驚いたマルクだったが、吸血鬼という事を思い出し、納得し
た。

吸血鬼は人の血を吸うからなのか、その寿命はかなり長い。実際
に、五百年も生きた吸血鬼も、記録に残っている。

つまりミネルは、マルクよりも遥かに年上だ。少なくとも百歳以
上差があるだろう。

『羽を怪我して飛べなくなっていたところを、ミネルに助けてもら
ったのです』

「なるほどね。でも、リンの方がまるでお姉さんのように思えるな」

『あの子にはいろいろと借りがありますから。それに、私もミネル
とは姉妹のように接しますし』

そうやって話しているうちに、森を抜けて村の外れまで来ていた。
「ここまで来れば、もういいだろう」

縄で縛った男達を荷車から降ろし、再び小屋に向けて歩き出す。

すでに月は天高く上がっていたため、森の中はリンの光が無くて
も見えるようになっていた。

『明日は、満月みたいです……』

「ああ。なかなか風情があるし、いつかゆつくり眺めたいな……。
今の僕には、そんな暇はないけどね」

『……マルクさん。ここから一人でも、あの小屋に戻る事が出来ま
すか？』

「え？ 道は覚えたから、帰ることは出来るけど」

『私はそろそろ仲間の元に戻らなければいけません。なので、ここ
でお別れです』

「そうか。何かミネルに伝えておこうか？」

『ミネルには何もありませんが、あなたに一つお願いがあります』
先ほどまで微笑んでいたリンは、真剣な眼差しでマルクを見ていた。

そしてマルクも、その様子を見て真面目にリンの言葉に耳を傾けていた。

『明日は満月。吸血鬼がもつとも活発になり、貪欲になる日です。もしかしたらミネルはあなたを襲うかもしれません。ですが……あなたの子を殺さないでください。そして嫌いにならないでください』

「……………」

『こんなお願いは勝手かと思います。あなたの事を考えてないわけではありません。でも、ミネルは私にとって妹のようなものです。ですから、どうか…………』

「……大丈夫さ。たとえ襲われたとしても、僕は彼女を殺す事はない。絶対に約束するよ。それに、僕は吸血鬼を観察したい男だ。殺すわけがないじゃないか」

『……ありがとうございます』

その言葉を最後に、リンは小屋とは別の方向だけれど、森の中へと消えていった。

「……満月、か」

マルクは再び月を見上げる。

夜を照らすその月はとても輝かしい光を地上に落とし、マルクと森の中を照らしていた。

まるで、地獄への道と罪人を映し出すかのように。

マルク・ヴァンプールの第十四回目のレポート

——とまあ、吸血鬼である『ミネル・スカーレット』出会ってから、彼女が誘拐されそうになったり、フェアリーである『リン』に出会ったりなど、様々な事がいろいろ起きた。

リンについてもいろいろ観察したいところだが、今回の目的は吸血鬼。なのでここではメモをする程度にしか記さない事にしておく。

それではここで、僕がこれまで読んで蓄えてきた吸血鬼についての知識を、ひとまず書いてみようと思う。

吸血鬼は人の血を飲む事で有名だが、ミネルを見ている限りどうやら、美味しいだとか不味いなどがあるらしい。その判断はどうやっているのかは謎だが、体格などから関係しているのかもしれない。そして吸血鬼の寿命について。これはリンから聞いた情報だが、いま住んでいる小屋に來たのは、約百二十年も前と言っていた。この事から長寿ということが分かる。今のところここまでしか確実な情報を手に入れていないが、他にも観察すべき部分がたくさんあった。

まず、初めに会ったときに彼女が僕を襲ってきたところだ。あの時どうやって空中を浮く事が出来たのだろうか？　もしかすると蝙蝠こうもりなどに関連しているかもしれない。

そもそも吸血鬼が誕生したのは、十五世紀に有名となったワラキア公ヴラド三世だ。今は十八世紀だからおよそ三百年前。幻獣の中では最近から存在し始めたと考えられる。が、これは元が人間のケースだ。血を吸う幻獣は遙か前から存在し続けている。

では何故、今頃になって吸血鬼という存在が目立ち始めたか。それは血を吸う、という行為が関わっている。

以前から存在している幻獣というのは、人間の血ではなく、獣や家畜などの血を吸っていた。それも少量しか吸わなかったため、あ

まり人間にばれる事が無かった。

けれど『人間の血を飲めば寿命が延びる』と聞いたヴラド三世は、夜深くに出歩き人間の血を吸い始めた。これが、吸血鬼が公おおやけになるきっかけとなった。主な説ではこれが一番の有力とされている。他にも元が蝙蝠だったのに、人間の血を吸ったことが原因で人の形を取るようになったなどと、いろいろな説がある。

もし最初が人間から幻獣になったとするなら、彼女が飛んでいる事に仮説を立てることが出来ない。が、蝙蝠から人の形を取るようになり、幻獣となったのなら説明がつく。

……て、生態観察なのになんで過去の話ばかり書いてんだよ。

まあともかく、リンの話によるとミネルは満月の日（今これを執筆している次の日だ）に活発に活動するらしい。

つまり、近くにいる僕の身がかなり危ないのだが、これくらいで諦めたりするわけがない。

無事に生き延びて、絶対にこの事を世間に広めるまで諦めたりしない。

パート8（前書き）

ここには吸血鬼についての解釈が書かれていますが、これは作者自身の考えであるため、本来の吸血鬼とは異なっています。その事をご了承ください。

パート8

翌日の朝。

目を覚ましたマルクは、吸血鬼という存在を観察するために、小屋の中に入ろうとしていた。

「おい、中に入ってもいいかな？」

ノックをしながらそう尋ねてみたが、ミネルからの返事は無い。あまり音を立てないようにして扉を開けて中に入ると、まだミネルは毛布に包まって眠っていた。

カーテンを締め切っているため、小屋の中はとても暗く、しかも森の奥深くに建てられているからか日ざしがあまり入ってくる事がない。

まさに、吸血鬼が住むにはうってつけの住み家だろう。

「……………う、ううん。もう、昼？」

入ってきたマルクの気配に気が付いたのか、ミネルが目覚めた。

「ミネル？ まだ朝だけど」

「……………朝？ じゃあ、もう少し寝る……………」

けれどすぐに目を瞑って眠ってしまった。

マルクは毛布を整えてやってから、床に落ちてあるミネルがまとっていた黒いマントをきちんと畳んで、テーブルの上に置いた。

（どうやら、観察は昼からだな）

そう思ったマルクは、さっそく小屋にある調理器具で朝飯を作り始めた。

（……………いい匂い）

香ばしい匂いでミネルは目を覚ました。

まだ日は昇ったばかりで日ざしが一番強いからか、それともまだ起きたばかりだからか頭がまだボーっとしていた。

吸血鬼は空を飛んだり、姿を変えたりなど、人には出来ない事が出来るかわりに、いろんな弱点があると世間では広がっている。が、実際は弱点が一つしか存在しない。

それなのに何故複数あると世間で広まっているのかというと、その弱点というのが吸血鬼によって違うからだ。

「にんにく 葫が苦手な吸血鬼もいれば逆に大好きな吸血鬼もいる。日ざしが苦手な吸血鬼もいれば逆に平気な吸血鬼もいると、弱点はさまざまだ。」

そのせいで、人々からは間違った常識として『弱点がたくさんある』と広まっている。それは逆に、それだけの数の吸血鬼がいたとされているわけなのだが。

つまりミネルの場合は日ざしが苦手で、別に葫が嫌いでもなく、十字架も見てもなんとも思わない。

「……………お腹、すいた」

身を起こしてそう呟くと、マルクが気付いて尋ねる。

「今、トースト焼いてるんだけど、蜂蜜でもかけようか？ それともジャムがいい？」

まだ夢うつつのミネルは、トーストを焼いているマルクの姿がかつて生きていた母の姿が重なって見えていた。

なので、こう答えていた。

「……………ガーリックトーストがいい」

「ガーリック？ あるにはあるけど、君は吸血鬼だろう？ 葫は苦手なんじゃ……………」

「……………もう忘れたの、母上？ ミネルは、吸血鬼だけど、苦手なのは日ざしだけだって。葫を嗅いだって、気を失ったりなんか、しないよ……………」

それを聞いたマルクは驚いたが、ミネルが寝ぼけている事にすぐに気付く、

「そうだったね。じゃあ、ガーリックトーストにするから、もう少し寝てていいよ」

「うん……」
そしてまた、ミネルは横になって目を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8952y/>

幻獣観察物語～吸血鬼～

2011年12月29日01時56分発行